

# 「協働」「連携」「教育」「指導」が医療に求められるキーワード

パート1、パート2を通じて、今後の診療所のキーワードとなるのが「グループプラクティス」「プライマリケア」だ。最後に、それらを実践している先進的な診療所の取り組みを紹介する。実現するために、どんなシステムが必要なのか。またスムーズに運営するためにはどんな力が開業医に求められるのか——。

Case 1

## グループ診療

医療法人社団「プラタナス」  
(東京都世田谷区)

### 複数の医師による診療体制では 診療の統一事項作成とIT活用がカギ



**異なる専門性が相乗効果を  
生み1日当たり150人の  
患者が来院**

東京都世田谷区を中心に複数の診療所を開設する医療法人社団「プラタナス」(野間口聰理事長)。同法人の診療所はいずれも複数医師体制、いわゆる「グループプラクティス」を実践している。このうち、外来診療のみを行う用賀アーバンクリニックは、

非常勤を含め医師6人による3診体制で1日当たり130人～150人の患者の診療にあたっている。

同院の田中勝巳院長は、複数医師体制のメリットをこう強調する。

「当院の医師は、小児科・循環器内科・脳外科・血液内科などそれぞれ専門が異なります。この体制によって多様な疾患に応えられるとともに、専門医を希望する患者さんのニーズにも応えられます」

巷間、診療所の複数医師体制の必要性は広まりつつあるものの、「診療方針を巡り医師同士の衝突などでなかなか実現しない」との声も聞かれる。同院では、こうした事態を防ぐべく、あらかじめ原則的な診療の統一事項を作成することで医師の意思統一を図っている。

「たとえば、風邪の患者さんへの処方は4日分ほど、長期処方は1カ月分、糖尿病患者さんには定期的に眼科を紹介するといったことなどをA

4用紙10枚にわたってまとめました。ある程度医師の裁量に任せつつも、この指針に則って行うことを行っています」

また、職員全員が集まる会議や、常勤医師と事務長が参加する幹部ミーティング、医師だけで行う連絡会をそれぞれ週1回実施しており、コミュニケーションの円滑化を図っている。



「複数医師体制は、多様なニーズに応えられます」と話す田中勝巳院長

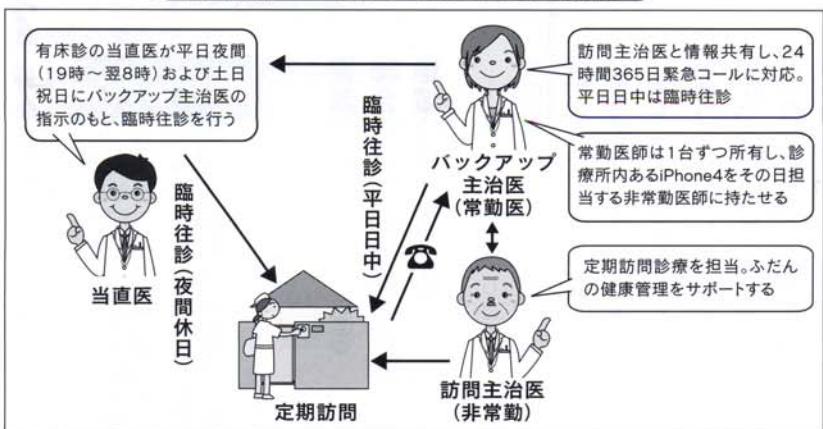
### 在宅部門では基点となる 「バックアップ主治医制」を構築

同法人では在宅医療でも複数医師体制を採用している。東京・世田谷の松原アーバンクリニック(18床)

は、現在、一般在宅患者が90人、有料老人ホームなどの施設を含めると1000人超の在宅患者を、非常勤を含めて約30人(常勤8人)の医師で対応している。

患者、医師とともに大規模でもス

図 松原アーバンクリニックの在宅診療体制



ムーズに運営できている理由は、今年4月から開始した「バックアップ主治医システム」(図)にある。これは、1ヵ月に2回行う定期の訪問診療は非常勤医が行い、緊急コールや往診などの突発的なことは常勤医がフォローするシステム。これにより、同院は医師の確保に成功したという。「訪問診療はあらかじめ日時を決めており、スケジュール

に沿つて非常勤医が訪問します。当院の非常勤医は大学病院や子育て中の方がほとんどで、そういう方にとっては予定がわかることが重要。緊急コールをとらなくてもいいといふのも大きいです。このシステムで3人の女性医師を確保できました」と、在宅医療部の関有香子部長は語る。

もう1つのメリットが教育だ。バックアップ主治医の常勤医は、非常勤医からその日に行ってきたことの報告を受ける。その際、教育的なフィードバックをバックアップ主治医からすることで、その医師の在宅医療のスキルアップを図る。バックアップ主治医となる常勤医の診療方針さえ一致しておけば、非常勤医への指導にブレがなくなるのもシステムの特徴だ。

診療方針の違いによる医師同士の衝突は、教育面の充実で乗り越えられると言っている同院では、近い将来、在宅医療のマニュアル整備を目指している。「たとえば、褥瘡ではウエットドレッシングを中心として、褥瘡の状態については少なくともこの部分を現場で判断できるようになど在宅医療の道筋をつけられるようなものをつくりたい。胃ろう

一つとつても医師によって考え方は違いますから。日中、常勤医は緊急コールがなければその時間が使えるので、日頃の症例の共有とマニュアル作りを通して診療方針の統一を図つていくことができます」

### iPhone4の活用で患者・職員とのコミュニケーション図る

グループ診療に欠かせない職員や患者とのコミュニケーションも万全。同院では、コミュニケーション強化に活用しているのが、iPhone4だ。

同院では、初回訪問時や重要な訪問の時にはバックアップ主治医も患者宅に訪問する。その後は、非常勤医師が訪問するが、顔見せの意味で、iPhone4に搭載されているフェイスタイム機能を活用してテレ



「予定がわかり、緊急コールをとらなくてもいいシステムが確立できれば医師を確保できます」と語る在宅医療部の関有香子部長

ビ電話でコミュニケーションを図る。「しばらく緊急コールのない患者さんとも、定期的に顔を見ながら話します。患者さんからすると、もう一人情報を知ってくれている医師がいるというのは大きな安心感につながるようですね」と関部長は強調する。

職員との情報共有は、「モバイル

ミー」というクラウドサービスを活用。患者や訪問看護師などの連絡先を医師が使用するiPhone4にシンクしてあるため、自分で入力していく患者でも、電話がかかってきた時に表示される。

